

追悼

池谷仙之先生のご逝去を悼む

塚越 哲



日本古生物学会元会長・池谷仙之先生は、2010年11月4日午後9時25分入院先の静岡県立総合病院（静岡市葵区）にて、奥様に看取られながら肺癌のため逝去されました。享年72歳でした。古生物学界にとっては、傑出した行動力と慧眼、そしてカリスマ性を兼ね備えた類い希な人物を失ってしまいました。先生の学問的、教育のご業績は言うに及ばず、学界全体に示した常に数歩先を読む行動力と終始一貫した姿勢、そしてその影響力は計り知れないものがあります。先生の門下生の一人として深い哀悼の意を表するとともに、ご足跡を辿りながら敬愛する先生との大切な思い出を交え、ここにご遺徳を紹介させていただきます。

池谷先生は、1938年5月2日東京府八王子市子安町のお生まれで、1954年都立立川高等学校に入学されました。高校時代は体操部に所属され、関東大会に出場して上位に入るほどの高い運動神経の持ち主でした。また生徒会などにおいても大いに活躍し、当時を知るご友人からは、「何にでも口出しするが、常に一本筋が通っていた」「自分がこうだと思えば、周囲を巻き込んで動くから大変」と伺ったことがあり、この頃には既に私どもの知る先生らしさを窺い知ることができます。高校卒業後、横浜国立大学学芸学部に入学されたのは1960年となります。当初は医師になることを志望されていましたが、断念され

たのだとお聞きしました。

大学入学後、教養課程ではボート部での活動に明け暮れ、その時までは特に将来古生物学の研究者になるつもりなどはなかったと聞かされております。先生に古生物学の道が開けたのは、部活動に明け暮れるある日、鹿間時夫先生に呼び出されたことからです。まだほとんど話もしたことがない鹿間先生に、「将来はどのようなのか」と聞かれ、「特に決めていません」とお答えしたところ、「もう部活動はやめて研究室に入りなさい」という趣旨のことを言い渡されたそうです。それから卒業研究の指導を鹿間先生から受けられるようになりましたが、鹿間先生からは「君は瀬棚層をやりなさい」とだけ言い渡され、「瀬棚層とはどこにあるのですか？」と質問すると、即座に「ばかもん、自分で調べなさい！」と一喝されたそうです。それからとにかく自分で調べることが研究なのだとわかった、と述懐されていたのを記憶しています。卒業論文は、「北海道瀬棚郡今町東南部の地質」と題され、特にイタヤガイ科二枚貝化石 *Chlamys* 属の肋の変異に着目した内容については、Shikama and Ikeya (1964): On the variation of *Chlamys islandicus* from a part of Setana Formationとして、横浜国立大学の紀要に上梓されました。卒業後の進路についても鹿間先生より「君は東大に行きなさい」と言われるまま、東京大学大学院理学系研究科修士課程（地質学専攻）に進学されました。

東京大学大学院では古生物学講座に所属し、高井冬二教授を指導教官として、修士課程および博士課程の5年間を過ごされます。池谷先生は、当時東京大学の古生物学研究グループの中では、誰も研究対象としていなかった有孔虫の研究に着手され、修士課程では卒業論文で調査した瀬棚層の有孔虫類化石の群集解析を主体とした古環境解析の研究（Studies on stratigraphy and paleo-environment of the Pliocene Setana Formation, southwestern Hokkaido, based on the foraminiferal assemblages）、また博士課程では当時の東大古生物学講座としては初の、化石ではなく現生有孔虫類の群集生態を扱った研究（Structure and succession of foraminiferal populations）を行われました。現生生物を対象とするパレオバイオロジー（Paleobiology：生物学的古生物学）は、現在ではごく当然のアプローチとされ、めざましい研究成果を上げていますが、当時の日本の古生物学界ではまだその科学的価値を認められてはいない状態でした。このような新しい概念に立った研究を進めることができたのは、当時古生物学講座の助教授だった故花井哲郎先生（本学会名誉会員・東京大学名誉教授）の強い影響があったことに他ならないでしょう。しかし、当時まだその重要性について認識されていなかったパレオバイオロジーに何の偏見も抱かず、周囲からの誹りをものともせずこれを自分の進む道とされたのは、まさに池谷先生らしい選択であったと思います。ちなみに先生の修士課程と博士課程の演

習報告(外国語論文を特定のテーマの下にまとめる総説)は、それぞれ「有孔虫の飼育実験とその古生物学への応用」、「生物の集団法則と群集生態学—有孔虫学への応用として—」と題してまとめられました。1960年代当時、実験生物学や集団遺伝学を古生物学に取り入れることを想定していたのですから、その慧眼には驚かされずにはいられません。以降、先生のご研究は常にパレオバイオロジーを中心に展開され、また門下生の研究・教育も一貫してこの概念の下に進められました。

学位取得後、先生は日本学術振興会奨励研究員として引き続き1年間古生物学講座で研究を続けられ、1970年に設立されて間もない静岡大学理学部の助手に就任されました。この頃はまだ静岡大学理学部には地球科学科はなく、地学履修コースという学部共通講座(定員5名)のみが設置された状態で、これは学科設立までの暫定的なものでした。しかし、この履修コースからは現在地球科学分野で活躍している多くの人材が輩出されました。そうした卒業生たちには、若くてバリバリ仕事をし、学生に厳しく指導しながらも、私生活までとことん付き合う熱心な池谷先生に、尊敬と畏怖の念を抱く者が多かったと聞いております。先生は2年半この履修コースに籍を置いた後、1973年にふたたび東京大学に戻られ、教授に昇任されていた花井先生の下で、古生物学講座の助手として研究・教育に尽力されました。2年半後に再び静岡大学に戻れますが、東京大学在任中から、静岡大学理学部に新設される地球科学教室の構想を任されていました。地球科学の研究と教育が国内で最高レベルに発揮できる新しいスタイルの教室を作るべく、夜遅くまで熱心に構想を練られていたことを、後に奥様からお聞きすることとなりました。

1976年に静岡大学理学部の助教授として着任されると、先生を待っていたのは新しくできた地球科学科を牽引してゆく役割でした。地方大学でレベルの高い教室を作るためには、「人材と特色」であるという信念のもとに、今日ある静岡大学の地球科学科を大きく育てられました。妥協せずに実力ある人材を集め、研究分野を絞って特色を出すこの手法は、大学が大競争時代に入った現在となつては当然の取り組みですが、30数年前の当時は、いわゆる地方大学の殆どが旧帝大系大学の「出店」的性格が強かったことを考えると、極めて画期的なことであつたと言わざるをえません。その後現在に至るまで静岡大学地球科学教室が、全国的に見ても古生物学における有数の拠点であり続けているのは、ひとえに池谷先生のご尽力に他なりません。このような大きな責務を全うされながら、先生は博士論文の研究を引き継ぐ形で現生底生有孔虫の研究を続けられました。噴火湾、下北半島沖、北日本太平洋沿岸、浜名湖等における一連の底生群集とその解析にかかわる研究です(Ikeya, 1977: Ecology of Foraminifera in the Hamana Lake Region on the Pacific

coast of Japan等)。正確な種分類と多変量解析を用いて生態/古生態学的な観点から研究されたこれらの論文は、日本の現生有孔虫底生群集に関する草分けの研究であり、海外の研究者にも数多く引用されました。この後先生は研究対象をオストラコーダ(介形虫類/貝形虫類)に変更されますが、オストラコーダの研究者として既に知名度が上がっていた私の学生時代でさえ、まだ海外の有孔虫類の研究者から別刷りが大量に届いていたのを目にしています。

池谷先生に研究面での大きな転機が訪れたのは70年代後半で、有孔虫類の研究からオストラコーダの研究へと軸足を移し、日本のオストラコーダのチェックリスト(Hanai, Ikeya, Ishizaki, Sekiguchi and Yajima, 1977: Checklist of Ostracoda from Japan and adjacent seas)を東京大学の花井先生らとともに上梓されたことによります。このチェックリストは、東南アジアのチェックリスト(Hanai Ikeya and Yajima, 1980: Checklist of Ostracoda from Southeast Asia)とともに、アジアにおけるオストラコーダ研究を活性化させる原動力となり、後進研究者にとつてもなくてはならない「バイブル」となりました。また、日本のオストラコーダ研究の方向性を示した“Studies on Japanese Ostracoda”(Hanai (ed.), 1982)に巻頭論文として掲載された“Ecology of Recent ostracods in Hamana-Ko Region, the Pacific Coast of Japan”(Ikeya and Hanai, 1982)は、現生内湾におけるオストラコーダの分布と記載に関するもので、それまでの内湾群集の研究に比べて、情報量と分類精度を大きく前進させたものとなり、その後の研究の規範の一つともいえるものになりました。

このような重要な研究が出版物として出揃う前、池谷先生は本格的なオストラコーダ研究に取り掛かるために、1980年3月より約2年間、旧文部省在外研究員として、英国とアメリカ合衆国に滞在されました。英国ではハル大学でJ. W. Neale教授の下、日本産タイプ標本の検鏡と付属肢を含めた現生オストラコーダの分類を、また合衆国では地質調査所(USGS)でJ. E. Hazel博士の下、カリブ海の大陸棚の遺骸群集の研究に取り組みました。しかし、この2年間の滞在中の研究成果は、なぜか上梓されることはありませんでした。ご自身の研究成果を帰国後に学生教育の中に生かすことによって実現しようとされたのかもしれませんが。例えば、Neale教授の下で行われた付属肢の研究については、日本の古生物学者としては、それまで花井先生だけが記載研究の業績をお持ちでしたが、私を筆頭にその後の門下生はこの付属肢に基づく研究を行う者が出ることとなります。先生はこのように優れた研究成果を上げ、古生物学の発展に寄与したことが高く評価されて、1984年に日本古生物学会より学術賞を授与されています。

私が池谷先生の研究室に入ることになったのは、合衆国から帰国された直後の1982年4月でした。当時静岡大

理学部地球科学科では卒論は選択制で、卒論を行う場合には学部3年の4月から研究室に配属をすることになっていましたが、4月になっても所属する研究室を決められず、いっそ卒論を選択するのをやめようかと考えていました。その折、帰国されたばかりの池谷先生が研究室紹介をして下さるといのでゼミに参加すると、それまで私が抱いていた地球科学、古生物学の概念とは全く違う、生物学に基づく古生物学、すなわちパレオバイオロジーが紹介され、大きな衝撃を受けました。私は、先生の洗練された雰囲気と理路整然とした説明、そして何よりも学問について大きなビジョンと情熱をお持ちであることに魅了され、その場で研究室に入る決心をしました。研究室に入るとその指導は厳しいもので、機器や文献の扱い、研究室の整理整頓に至るまで非常に細かく指導を受けました。週末に研究室に来るのは当たり前で、家庭教師のアルバイトがある日も終わった後研究室に戻る、という生活が始まりました。他の研究室ではまだ自由な学生生活を謳歌する者もいましたが、私は元の生活に未練はありませんでした。研究室にはいつも熱意をもち、学生を真正面から見据えて下さる先生がいらしたからに他なりません。私はこの後、大学院修士までの4年間、池谷先生のご指導を受けることになります。私にとって非常に幸運だったことは、先生が在外研究員としての渡航からご帰国直後であったため、豊富な研究上のアイデアや情報をお持ちで、かつまだ学内外の要職に就かれる前であったため、比較的時間にゆとりをお持ちだったことです。思い出深いのは、実体顕微鏡下でオストラコーダを拾う競争をしてくださったことです。次第に私の方が速くなり、「もう君の方が速いな」と言われた時には素直にうれしいと思えました。私は修士課程修了までに、潮間帯に棲息するオストラコーダの生物地理と感覚毛の位置に基づく分類、付属肢（特に交尾器）の形態を用いた分類などの指導を受け、先生との大切な共著論文として後に上梓されました（Tuskagoshi and Ikaya, 1987: The ostracod genus *Cythere* O. F. Müller, 1785 and its species / Ikaya and Tsukagoshi, 1988: The interspecific relations between three close species of the genus *Cythere* O. F. Müller, 1785 / Tuskagoshi and Ikaya, 1991: A description of *Cythere japonica* Hanai, 1959 (Podocopida: Ostracoda)). これらの研究は私のオストラコーダ研究者としての出発点ですが、そのコンセプトは、先生が海外滞在中に培われた学問的素地を惜しみなく注いでくださったものに他なりません。

1988年に池谷先生は教授に昇任されますが、この後静岡大学を停年退官されるまでの16年間は、学内外での各種の要職において絶大な力を発揮されました。学内では1992年に将来構想委員会学部等部会で委員長に就任され、教養部の改組という難問を情報学部の設置とともにまとめ上げるなど、現在の静岡大学の根幹を築いたともいえ

ます。この後評議員、大学院理工学研究科担当、同副研究科長、同研究科長等の要職に就かれました。特に大学院理工学研究科の設立は、地方大学が博士課程をもつ大学になるという、発展的転換を遂げることを意味しますが、先生は設立準備当初から指導的な立場でご尽力されました。学外でも、日本学術振興会において複数の専門委員を務められ、また大学入試センター教科専門委員会委員、同試験問題特別専門委員会委員、同教科科目第二委員会委員、日本学術会議においては、古生物学研究連絡委員会委員、同委員長、地質科学総合研究連絡委員、さらに大学評価・学位授与機構大学評価委員会専門委員（理学系評価専門委員会委員）等、我が国の学術を国家レベルで推進する要職を歴任されました。日本古生物学会においても、1989年より17年間評議員を務められ、1997年より2年間は会長に就任され、持ち前の強力な指導力で学会を牽引されました。このような学術界全体の発展に寄与する膨大な任務をこなされながら、先生は片時もご自身の研究を軽んずることはありませんでした。オストラコーダの群集解析（Cronin and Ikeya, 1990: Tectonic events and climatic change: Opportunities for speciation in Cenozoic marine Ostracoda / Ikeya and Itoh, 1991: Recent Ostracoda from the Sendai Bay Region, Pacific coast of northeastern Japan / Ikeya and Cronin, 1993: Quantitative analysis of Ostracoda and water masses around Japan: Application to Pliocene and Pleistocene paleoceanography等）、分類・生態（Zhou and Ikeya, 1992: Three species of *Kriithe* (Crustacea: Ostracoda) from Suruga Bay, central Japan / Ikeya, Shimura and Iwasaki, 1995: Ecology and adaptation of the genus *Spinileberis* in the North Pacific等）、生活史（Ikeya and Kato, 2000: The life history and culturing of *Xestoleberis hanaii* (Crustacea: Ostracoda)等）他、オストラコーダを素材に多方面にわたる研究を展開されています。中でも、2001年に第14回オストラコーダ国際シンポジウムを静岡大学に誘致したことは、学術研究面でも世界的なリーダーシップを発揮されたことを象徴しています。池谷先生が大会長を務められたこのシンポジウムは、25カ国、132名の参加者があり、1964年から開始された本国際シンポジウム開催以来最大規模となりました。日本で開催された本国際シンポジウムは2回目で、1985年にも静岡で行われ、その時には池谷先生は事務局長を務められました。同じ開催地で2度このシンポジウムが開催された例は他になく、このことはオストラコーダ研究としては後発だった日本が、世界的研究拠点となったことを意味します。先生の高いモチベーションと、国内外を問わず人を引き付けるカリスマ性が、日本のオストラコーダ研究の著しい発展をもたらしたことは、疑うべくもありません。シンポジウムにおける研究成果は、先生が編集長となって2つの国際誌の特別号として上梓されました（Ikeya, Kamiya and

Cronin (eds), 2005: Earth Environments and Dynamics of Ostracoda / Ikaya, Tsukagoshi and Horne (eds), 2005: Evolution and Dynamics of Ostracoda). またこの間に、先生は古生物学の普及にも貢献され、学生や一般読者用にいくつもの本を著されました。「進化古生物学入門」(池谷仙之・山口寿之, 1993), 「太古の海の記憶—オストラコーダの自然史—」(池谷仙之・阿倍勝巳, 1996), 「地球生物学—地球と生命の進化—」(池谷仙之・北里 洋, 2004) 他、先生らしい明快な文体で書かれたこれらの著書は現在でも多くの読者に親しまれています。

池谷先生は、2004年3月に静岡大学を停年退官され、同年4月に静岡大学名誉教授の称号を授与されます。

ご退官後の池谷先生の目は、地域に向けられます。既に先生は2003年に設立されたNPO法人「静岡県自然史博物館ネットワーク」の理事長に就任されており、現在では300名規模の会員を擁する団体になるところまで指導されました。このネットワークの目的はその名の通り、未だ県立の自然系博物館をもたない静岡県に自然史を中心とした基礎研究の拠点を作ろうとするもので、池谷先生が志された最後の大きな目標であったと思われます。大変残念なことに、自然史博物館の設立は先生のご存命中に達成されることはありませんでしたが、先生が生み、そして育てたネットワーク活動は年々広がりを増しています。志を新たに、残された私たちが先生のご遺志を継いで、近い将来に必ず静岡県立自然史博物館を設立しなければなりません。このネットワーク活動の一つの成果

として、静岡県の豊かな自然を紹介した「しずおか自然史」(池谷仙之監修)が2010年10月に刊行されました。原稿の一つ一つを細部にわたって目を通されたこの本は、先生が手掛けられた最後の出版物となりました。

池谷先生の類い希なご功績は、晩年の2008年に、日本古生物学会から同学会最高の賞である日本古生物学会賞(横山賞)を授与されたことにも象徴されています。さらにご逝去に際しては、内閣総理大臣より瑞宝中綬章を授けられ、従四位に叙せられました。まさに池谷先生のごこれまでのご業績に相応しいご荣誉でした。

2010年9月末に池谷先生の病室にお見舞い上がった時、先生にはもう私の声は届かないと思い、迂闊にも「心配しています」と申し上げてしまいました。すると口を真一文字に結んだまま、「心配などするな」とばかりにはっきりと首を横に振られました。最後のお見舞いとなった10月に私が病室を出る時は、いつもそうして下さったように、右手を軽く挙げてさえ下さいました。最後まで強くカッコイイ池谷先生でした。どうかこれからも、私たちを見守りつづけ、私たちの心の中で叱咤激励してください。かけがえのない多くの教を本当にありがとうございました。私たちは、池谷先生から教を受けたことを生涯誇りに思います。これまで授けていただいた恩義に深く感謝いたします。

池谷先生のご遺骨は、池谷家の菩提寺である静岡県駿東郡小山町柳島の本蓮寺に納められています。

